

オーストリアドイツ語とアイデンティティ

坂 野 久

0. はじめに

「専門家達は、我々オーストリア人は『意志の国民』であると言っている。即ち、共通の言語、文化、家系が我々のオーストリアという存在を定めるのではなく、この共通性への意志のみである。そして私はそれを素晴らしく非常に重要なことであると思う。なぜなら自己を他の誰からも切り離せないし、また誰も切り離して考えられない。オーストリアを表明することは、誰かに対する否定 (Nein) ではなくて、オーストリアに対する強い肯定 (Ja) である。」¹⁾

これは1996年5月19日新宮殿での Ostarriichi-Feier (オスタルリキ祝典) で行った当時のオーストリア連邦大統領 Thomas Klestil の祝辞である。彼が言うように、オーストリアの存在を定めるのは、共通性への意志のみなのであろうか。その共通性への意志とは何を意味しているのであろうか。言語、即ちドイツ語、特にオーストリアドイツ語は、オーストリアのアイデンティティ形成にとって重要な役割を果たしているのであろうか。本稿ではこのような問題を、以下の項目に沿って順次考察することにした。

1. ネイション、言語、アイデンティティ
2. ドイツとオーストリアのナショナルアイデンティティ
3. オーストリアドイツ語とアイデンティティ
 - 3.1. 複中心言語としてのドイツ語
 - 3.2. 複中心言語としてのオーストリアドイツ語
 - 3.3. 複中心言語ドイツ語とアイデンティティ
 - 3.4. 談話分析に見られるオーストリアアイデンティティ

1. ネイション、言語、アイデンティティ

オーストリアで2004年に行われたあるアンケート調査では、「eine Nation (ネイション) は、

人が生活している国家に対する人々の同意に基づいている、たとえスイスのように人々が異なる言語を話していても」という意見に同意した国民の割合は83%に達した。他方、「eine Nation (ネイション) は共通の言語に基づいている、この言語を話す人々が一つの国あるいは幾多の国で生活しているかに関わりなく」という意見に賛同した人々は15%に過ぎなかった²⁾。

この言語ネイション (Sprachnation) とコンセンサス・国家ネイション (Konsensual-/Staatsnation) のいずれに賛同するかという、オーストリアにおける社会学的なアンケート調査において、言語から独立した共通の国家を中核とするナショナルコンセプトに、かなり多数の賛成意見が見られる。即ち、オーストリアでは言語ネイションよりも国家ネイションに賛同する者が多いと言えよう。しかしオーストリアでは公式に言語ネイションに賛同するという意見表明が出来ない背景もある。これは言語ナショナリズムに繋がり、大ドイツ言語ネイションに及ぶ問題提起となり、オーストリア第二共和国においては、憲法上公式には望めない所見となっている。しかしまた現実の言語政策と政治家及び一般市民の個人的な談話などには、言語ネイションに対する本音がしばしば現れる場合もある。

オーストリアにおけるネイションを考える場合、二つのナショナルコンセプトがその特徴となるであろう。その一つは、主観的・主意主義的ナショナルコンセプトで、主観的な意志の共同体としてのコンセンシャル (当事者間の合意) ネイションである。また他の一つが、客観的・文化的ナショナルコンセプトで、ネイションは歴史的に成立し、言語、領土、経済生活、文化共同体の中で明らかになる心理的な存在 (共同体) に基づくものである。

この二つのナショナルコンセプトの違いが、「国家ネイション」と「文化ネイション」として具現化されている。前者は共通の国家的・政治的発展によって形づくられた共同体である。例えば、古代ギリシャの *dèmos* (ディモス) やフランス共和制などがその典型的な例となろう。後者は国家の地理的な境界によって左右されない、共通に拡大した文化と言語によって定義され、*étnos* (Volk) 概念によって連想される共同体である。例えばドイツ文化ネイションがその例となろう。

このドイツ言語・文化ネイションは、オーストリアにおけるネイションを考える場合、伝統的・保守的な文化・言語ネイションと見なされ、極端な場合には人種差別主義的な「血統共同体」と受けとめられる場合もある。しかし1945年以降オーストリア住民の意識存在の中には、この保守的な言語ネイションではなく、政治的な意志共同体であるオーストリア「国家ネイション」が浸透している。

このようなオーストリアにおける言語・文化ネーションと国家ネーションの複雑な関係が、オーストリアのナショナルアイデンティティ形成に大きく影響している。ナショナルアイデンティティとは、「想像された共同体」即ち、「共通で類似の観念複合体」であり、「共通で類似の感情的な見解・態度・行動を自由に裁量する認知図式」であると定義づけられるが³、本質的には、一つのナショナルアイデンティティは存在しなくて、むしろ大衆と、背景となるコンテキストによって、異なるアイデンティティが構成される。その際、政治的なエリートとメディアから提供されるアイデンティティ草案と、日常的な談話の間に、相対する違いが存在することは希ではない。

ナショナルアイデンティティに関する議論には、内容的には国家的な共通性のみならず、共通文化をも引き合いに出される場合が多いので、国家ネーションと文化ネーションという伝統的な厳格な二分論ではなく、文化的・国家的両ナショナル要素を常に顧慮しておく必要がある。特に言語は文化的ナショナルアイデンティティとの関連が深い。F. Coulmas は、「言語は外へのグループ所属性を示し、内へのグループ所属性を作り出す最も明確な、最も力強いシンボルシステムである」⁴と述べている。故に言語政策はしばしばナショナルアイデンティティ構成の主要手段となる。F. Coulmas はさらにこの言語政策の意義を次のように語っている。「言語がネーションのための一つのまとまりを創るのではなくて、逆にネーションがそのアイデンティティの表現として、一つの統一した言語を創造するのである」⁵。たとえスイスやベルギーのような例が、統一的なナショナル言語は一つのネーションが存在するために必要でないことを示していても、ヨーロッパではネーション形成のプロセスはナショナル言語の創造と強く結びついていたことは確かである。影響力のある方言がナショナル言語となったのである。特に大植民地権力をもったスペイン、ポルトガル、英国、フランス、オランダのようなネーションがそうであり、イタリアとドイツは権力集中化が遅れ、19世紀以降にネーションとなった。

またこのようなナショナル言語へのプロセスにおいて、少数派弾圧が行われたことは明かである。権力中枢に対する住民の忠誠心が国家語によって結びつけられ、ネーションという抽象的な理念に収束させられることによって、他の全ての言語と言語ヴァリエーションが標準化され、標準化の枠から外れた極端なものが禁止された。フランスの国家ネーションがその典型的な例といえよう。そこでは統一された国家語「標準フランス語」の普及とそれによるナショナル教育の徹底が行われている。歴史的に見ても、すでに1539年に「役所言語使用の規則」によって言語の中央集権化プロセスが始まり、1881～1884年の学校法成立によって、最終的にフランス語が唯一の授業語として設定され、他の全ての言語を意味する *patois* はそれによって組織的に差別される

ことになった。フランス語はフランスというネイションの多数派の「母語」にされてしまったのである。しかしそれでも、1973年の国民議会の調査によると、人口2600万人中約300万人しか標準フランス語を流暢に話せなかったと言われている⁶。「民衆の言語」がいわゆる「上」から指示された結果であろう。

他方、ハプスブルク（オーストリア・ハンガリー）帝国における独自のオーストリアネイション形成挫折の原因は、統一的な言語政策の失敗であったかもしれない。当初は帝国全体に、後にはオーストリア側に、ドイツ語を国家語として浸透させようとしたヨーゼフ二世以来何度も繰り返された企ては失敗した。ハンガリー側では1867年までラテン語が国家語として残っていた。1869年の帝国国民学校法と *utraquistische Schule*⁷ の導入によって、非ドイツ語少数派に対するより強いゲルマン化が遂行された。しかしそこにはフランスの場合と本質的な違いが見られる。*utraquistische Schule* では、少なくともナショナル的な教育プロセスの初めには、それぞれの少数言語に一定の働きが与えられていたからである。この伝統は今日のオーストリア第二共和国でも受け継がれている。

いずれにしても19世紀以降のヨーロッパでは、すでに存在しているナショナル的な統一体から出発して、言語帝国主義が内面へ推し進められ、ネイションの言語統一体が求められた。そして言語はナショナル的な統一運動の理念的な手段として、ナショナル国家設立の中心的、シンボリックな役割を果たしていた。即ち、言語はネイション創造の中核的な要素となり、「国家語」はナショナル的な教育機関によって認められ、「母語」として理念的に美化されたのである。

この種のコンセプトが依然として有効であることが、グローバル化プロセスやポストナショナル的な要望にもかかわらず、最近のオーストリア周辺の国々の出来事からも理解できよう。かつてのユーゴスラビアとソヴィエト連邦の後継諸国においても、言語はナショナルアイデンティティ形成過程の手段として用いられ、また言語政策はナショナル的な統一手段として機能させられている。故に、言語はナショナル的な自己認識過程において本質的な役割を果たしている。これがナショナルアイデンティティを議論する際の始点となるべきであろう。

2. ドイツとオーストリアのナショナルアイデンティティ

1989年の部分的に成功したドイツ統一プロセスにおいて、言語の中心的な役割が文献等でよく指摘されている。部分的に成功したとは、その結果がオーストリア等ドイツ語地域全体を含む「大ドイツ的」なものではなく、旧東西両ドイツ地域に限定された意味で「小ドイツ的」という

意味である。例えば、British Association for Applied Linguistics 1991 の会議録には、ドイツのナショナル意識存在の成立には「言語・文化ネイション」の政治化が決定的なものであった、と述べられている⁸。そして言語がネイションにとって最も重要な特徴であるというコンセプトは、特に「ドイツ的な思考」と関わりがあり、さらにドイツ統一のコンテクストで不安を抱かせる事実として、「血統・家系原理」がドイツのナショナルリティ定義に依然としてまだ有効であることも指摘されている⁹。「血統・家系原理」は東欧諸国からの帰郷移民に対するドイツ政府の政策に現実に現れている。また F. Coulmas は、Herder, Fichte, Humboldt のようなドイツの思想家達が、言語を「ネイション形成の機関」として、また「ネイションの魂」としてテーマ化していると指摘している¹⁰。

ヨーロッパで「遅れてきたネイション」とされるドイツでは、言語のイデオロギー化と機能化がナショナルのプロセスで確立された。この観点から見れば、オーストリア・ハンガリー帝国内部でオーストリア的ナショナル意識存在が生み出されなかった理由は、帝国内部の多言語性が大きな要因と考えられる。ドイツ語を帝国内の国家語として実現させようという企画が幾度も挫折することによって、各言語のナショナル的な要素がこの「国家像」形成過程でさらに強化され、それが一言語（ドイツ語のみ）によるナショナル的な動きを飛び越えて、言語相対的に同質である「帝国後継国家」を形成することになった、と考えられる。

このような展開は、オーストリア・ハンガリー帝国内のドイツ語を話す住民達の意見に反映されている。その一つは、彼らがより大きなドイツ文化・言語ネイションのメンバーと意識していたことである。それは最終的に1918年の「ドイツ語国家」（ドイツ・オーストリア共和国、第一共和国）という形で実現し、その後ドイツ併合という結果となった。もう一つの意見は、「古いオーストリア的な」複言語アイデンティティを望む意見であった。しかしそれはいわゆる「忠誠心」からまず第一に「君主・皇帝」と結びつき、「国民」と結びつくものではなかった。そして前者の意見を選択したのが、とりわけ政治エリート、インテリ、科学者達であり、後者の意見を選んだのは、むしろ下層住民とスロヴェニア人のような少数派に属する人達、あるいは移住してきたユダヤ人達であったと言われている¹¹。前者のオーストリアエリートの意見の産物が、いわゆる「ドイツ語国家」の連邦憲法第8条「ドイツ語は共和国の国家語である」となったのである。

1945年第二共和国誕生と共に、オーストリアはドイツ文化ネイションの理念から離れ、すでに言及したように、オーストリアの歴史家の大多数は「国家ネイション」「意志・コンセンシャルネイション」を問題にするようになった。オーストリアネイションが存在するために重要なのは、

オーストリア意識存在が存続することである。このオーストリア自己意識存在は、60年代以降オーストリアナショナルアイデンティティへと濃縮された。オーストリアを一つのネーションと見なす割合が、1964年には47%、1970年代には64%、80年代には74%であったが、90年代には78%に上昇し、2000年～2004年には76%で上昇傾向が止まっている¹²。

公式の政治談話・講演会等では、言語、特にドイツ語は、オーストリアアイデンティティ構成に重要な役割を果たしていないといわれている。オーストリアネーションは1945年以降に成立したが、それは本質的に言語・文化ネーションに対する対抗概念としてであった。独自のオーストリアネーションを定義づけるためには、出来る限りドイツとの違いを強調することが必要であり、故にオーストリア人の大多数にとってドイツ文化ネーションから距離を置くことは自然なことであった。しかしそれでも特に学問分野では、オーストリアは大ドイツ文化・言語ネーションの一部であるという見解がある。このテーゼを支持する L. Höbelt は、ネーション区分の基準は「母語」であり、ドイツ語を話すスイス人、南チロル人と同様にオーストリア人の大多数はまさに「ドイツ語人」で、Deutsch と Österreichisch という分類はお互いを排除し合うものではなく、我々のアイデンティティの異なる要素であり、さらに「オーストリアは今日その歴史におけるよりもよりドイツ的である」と述べている¹³。

このようなネーション区分の基準を「母語」とする考え方が、依然として支持されている事実を次のアンケート調査結果が示している。

「母語は人間が維持すべき最も価値の高いものの一つである」と言う意見に、50%が賛同し、「独自の母語が後退を余儀なくさせられる場合でも、英語の拡大を歓迎しますか、」という問いに、25%は肯定の、63%は否定の回答をしている¹⁴。

しかしすでに言及したように、オーストリアの歴史家の大多数はこの立場を拒否しており、また住民に対するアンケート調査(1987～2004年)でも、約四分の三がオーストリアは国家ネーションであると認め(69～83%)、言語ネーションに賛同するのは国民の約四分の一にすぎない(15～28%)¹⁵。さらに A. F. Reiterer の調査(1988年)では、ナショナル意識存在のための言語の役割に関して、「言語がそのために決定的に重要である」との意見は約16%に過ぎず、「経済的・政治的に共同生活するという意志が重要である」との意見は約30%に達している。ただし FPÖ (Freiheitliche Partei Österreichs=オーストリア自由党) 支持者の間では、言語に優位を置く割合が、約41%に達している¹⁶。非教養層、農民、年金生活者、旧ブルゲンランド人、そして FPÖ 支持者達は言語をネーション概念の中心要素と見なす傾向がある。他方、教養層、

サラリーマン、若者、ウィーンのような大都会の住民達にとっては、言語はネーション概念の基準とはなっていない。故に、ネーション概念は社会階級層によっても基準が異なると言えよう。

このようなオーストリアネーションに関する様々な見解とアンケート調査結果は、大きく次の二つの意見に凝縮されよう。

- 1) オーストリアはドイツ的なネーションの一部である。
- 2) オーストリアは独自のネーションである。

前者を支持する層は、言語・文化ネーションを重視する一部のエリート層と FPÖ 支持者が目立つが、オーストリアの一般市民は後者を支持している。後者の場合も言語要素を伴わない国家ネーション中心のイデオロギーが実際に支配的であるとは断定できない。言語が自然なオーストリアアイデンティティ構成に際して一つの重要な役割を果たしている事実を無視できないからである。言語、特にドイツ語は、オーストリアアイデンティティ構成のために如何なる意味があるのか。この問題をさらに詳細に観察するには、主に次の三点を顧慮しなければならないであろう。

1) オーストリアドイツ語の問題、即ちオーストリアドイツ語はオーストリアアイデンティティ構成にとってどの程度役割を果たしているかという問題。

2) 少数言語の問題、即ち少数言語話者・複言語話者にとってのオーストリアアイデンティティの意義とその可能性と限界について。

3) 国家語としてのドイツ語の問題、即ち学校での授業語としての、役所での役所語としての、ナショナル的なコミュニケーション手段としてのドイツ語の問題。

本稿では紙面の都合で、特に1)「オーストリアドイツ語とオーストリアアイデンティティ」に焦点を絞って、以下考察することにした。

3. オーストリアドイツ語とアイデンティティ

3.1. 複中心言語としてのドイツ語

ドイツ語を話す住民の地域が少なくとも四つの大きな国家へ区分されるという1945年以降の歴史的な展開によって、同一言語の様々なヴァリエーションが問題となってきた。言語的ヴァリエーションとは、「一言語の組織全体に機能的に互いに区分される構造的サブシステム」¹⁷と定義づけられる。地理的な領域でのヴァリエーションは、中心および周辺領域をもつ連続体として考えることができ、その中心領域はある程度の安定性と同質性によって特徴づけられ、それは標準ヴァリエーション (Hochsprache, Schriftsprache, Gemeinsprache) として、日常語 (Umgangsspra-

che) として、あるいはまた方言 (Dialekte) として表示される。「ドイツ語はおそらくヨーロッパで最も変化に富む言語である」¹⁸ と言われるように、ドイツ語はヴァリエーションが豊富な言語であることは確かである。

ドイツ語標準語 (die deutsche Standardsprache) については、前世紀の80年代に、複中心的言語が重要であるという見解が生まれ、ゲルマニスティックにおいても1986年のスイス (ベルン) での IDT (Internationale Deutschlehrertagung) と ZGL 論叢での P. von Polenz の次の発言が頻繁に引用されている。「ドイツ語の歴史のなかでも完全に固定妄想にとらわれた標準化という時代は今日ではおそらく終わりを迎えたであろう」¹⁹。それ以来、ドイツ語は複中心的・複ナショナル的言語と見なされている。即ち、ドイツ語はその言語の拡大地域が複数国に及び、言語発展の幾多の中心をもっており、それぞれにいわゆるナショナルヴァリエーション、あるいは独自の規範と慣用をもつヴァリエーションが存在する。そのような複中心的あるいは複ナショナル的言語の例としては、ドイツ語以外に英語、フランス語、スペイン語、中国語、アラブ語などもあげられる。

„plyzentrische“ あるいは „plurizentrische“ Sprache (複中心言語) という用語は、アメリカとドイツの社会言語学者 W. A. Stewart と H. Kloss によって導入され、オーストラリアのゲルマニスト M. Clyne によって、現在使用されている意味に転用されたと言われている。しかしまた類似のコンセプトがナショナルヴァリエーションという概念と結びついて、ロシア言語学で50年来発達しており、オーストリアから亡命したユダヤ人 E. Riesel がこの種の概念をドイツ語に翻訳したとも言われている。この概念史に関しては、U. Ammon (1995) に詳しく論じられているが²⁰、それによると幾多の言語中心をもつ言語はいわゆる plurizentrische Sprachen であるが、その際特にネイションが問題となる場合には、plurinationale Sprachen と言われている。故にオーストリアドイツ語は、複中心言語ドイツ語の「ナショナルヴァリエーション」であり、ドイツ語の各ヴァリエーション Teutonismen (ドイツ連邦ドイツ語)、Austriazismen (オーストリアドイツ語)、Helvetismen (スイスドイツ語) が存在することになる。Ammon (1995) によれば²¹、異なった中心内の少なくとも二つの標準ヴァリエーションを自由に使える言語は、「複中心言語」と名付けられる。「複ネイション言語」とは、その中心に少なくとも二つのネイションが数えられる複中心言語である。その際、完全な中心というのは、標準言語が独自の辞書類で確立されている場合であり (例えば、ドイツ、オーストリア、スイス)、他方、標準化の中心が明確でない場合は、nationale Halbzentren と言われている。例えば、

ドイツ語の場合、リヒテンシュタイン、ルクセンブルク、東ベルギー、南チロルがそれに該当する。

異なるヴァリエーション間には頻繁に非対称的で不均衡な関係が存在する、それを M. Clyne は D (dominante) -Nationen (主たるネイション) と A (andere) -Nationen (他のネイション) と表示している²²。彼の表現に従うと、ドイツ語領域では、ドイツ連邦のドイツ語がDネイションのヴァリエーションを表しており、オーストリアドイツ語はAネイションのそれを表している。そしてDネイションをそのヴァリエーションの標準と見なし、Aネイションをそのヴァリエーションの派生、非標準的なものと見なしている。そしてAネイションのエリート達はDネイションの規範に従っている。またドイツ語ヴァリエーション間の非対称性も存在する。例えば、ドイツの標準ドイツ語は、スイスやオーストリアと比較すると、その言語基準がより高い地位にあり、ドイツから他の地域へ、その反対の動きよりもより強くヴァリエーションの移動が行われている、と理解されている。

3.2. 複中心言語としてのオーストリアドイツ語

オーストリアドイツ語の独自のヴァリエーションの存在は、とりわけ1945年以降のオーストリアの特殊な歴史的展開によって理解される。ドイツとの違いを強調することが、オーストリアの自己理解の本質的な要素となり、そこから言語政策上「オーストリア語辞典」(Österreichisches Wörterbuch)²³ が出版されることになった。これは学校と役所のための辞書で、50年代初めからある意味で独立したオーストリア言語政策のために存在していたと言っても過言ではないであろう。また複中心コンセプトを先取りしていたとも言えよう。オーストリアヴァリエーションに関するその後の学術的研究は、I. Reiffenstein, W. U. Dressler/R. Wodak, S. Moosmüller, P. Wiesinger, R. Muhr, H. Moser²⁴ 等の研究者達によって進められている。

個々のヴァリエーションの記述は、現在のところ Ebner (1980), Sedlaczek (2004), Ammon (2004) 等の辞書によって、積極的に行われているが、そのヴァリエーション領域は決して些細な辞書領域のみではなく、全ての言語領域に及んでいる。その若干の例を以下にあげておきたい。(Aはオーストリア、CH はスイス、Dはドイツで一般的な表現を示す。)

辞書領域での差異はよく取り上げられているが、オーストリアでの日常生活で、„mal“, „lecker“, „schöner Wein“ のような表現は異質に感じられる。行政用語では、Anrainer (A) (隣接居住者) と Anlieger (D) と Anwohner (D, CH) が存在し、また Konsumentenschutz

(D, CH) (消費者保護) と Verbraucherschutz (D)、あるいはまた Pensionsversicherung (A) (年金補償) と Rentenversicherung (D) が共存する。Beilage (A, CH) (添付) は Anlage (D) に、また Aufnahmestopp (A) (採用中止) は Einstellungsstopp (D, CH) に対応する。

音声領域では、おそらくドイツ語領域の大部分がそうであろうが、理想化されたドイツ語の「標準発音」からかなり離脱している。標準ドイツ語の明るい [a] がオーストリアではくすんだ [ä] に、逆に標準ドイツ語のウムラウト ä [ɛ] は、オーストリアでは明るい [a] と発音される。複母音による鼻母音化 (dann [daun], Zahn [zaun])、語末の曖昧母音消去 (leben [le:bən]、r と l の母音化 (sparen [ʃpəɹn], alt [ɔɹd], also [oeso]) など特徴的である。標準ドイツ語に一般的な b/p, d/t, g/k, s/sch の有声・無声閉鎖音を区分せず、その中間音で発音している。元来、子音は無声音のみで、多くのオーストリア人は有声音を学校で学習している。語中の st, sp も無声音で /scht/, /schp/ となる (Kasperl [kaʃpɛɹl], Wurst [vuɹst])。

形態面では、名詞の性の違い (der Polster (A), das Polster (D, CH))、単数形・複数形の違い (Friede (A), Frieden (D); Erlässe (A), Erlasse (D, CH)、接辞 -s 等の有無 (Schweinsbauch (A), Schweinebauch (D))、接尾辞の違い (Wissenschaftler (A), Wissenschaftler (D)) 等が特徴となる。

シンタックス面でも、標準ドイツ語では冠詞を避ける場合に、オーストリアでは (南バイエルンでも) 冠詞を多用する (Meier/der Meier, Vati/der Vati; ich habe Hunger/einen Hunger)。Tempus では口語的な表現として Perfekt が、文語的表現として Präteritum というパターンがドイツでは一般的であるが、オーストリアでは文語的表現でも Perfekt が多用されている、文語と口語の隔たりが大きくないと言えよう。また接続法の用法は、オーストリアでは非現実話法に限定され、いわゆる間接話法で使われるケースは少ない。

プラグマティック上の特殊性も見られる、例えば、„Servus, Herr Direktor!“、„Sehr geehrter Herr Professor, lieber Hans!“ のように、オーストリアでは呼びかけの際に、称号が多用されている²⁵。

ところでこのようなオーストリアドイツ語の特徴が、多くのオーストリア人にとってオーストリア標準語として受けとめられているのであろうか。複中心言語のコンセプトに、オーストリア人の言語意識がどのように対応しているかを、S. Moosmüller が研究している。そこではインタビューされた大多数の人々は、オーストリア独自の標準語を受け入れ、そして頻繁にオースト

リアのナショナルアイデンティティと結びつけて使用していると、報告されている。例えば、ある女性教師は次のように述べている。「独自の標準語はあると思っている。そしてそれを肯定的なものと思っている。なぜならそれは我々のナショナルな自己認識の一部と言えるものだから。故にオーストリアのネイションは言語と関わりがあるものだと思う。そしてドイツ連邦あるいは他のドイツ語を話す国々で使用されているドイツ語との混交が強く促進されないことを願っている。」²⁶

しかしこのオーストリア標準語が社会的にまた地域的に如何なる層に根を下ろしているかについては明確ではない。S. Moosmüller によれば、ウィーンやザルツブルクの上流社会層のヴァリエーションが超地域的に標準化に適したものと考えられている²⁷。しかしオーストリア全域において、オーストリアヴァリエーションがどの程度標準語として評価されているかについては、まだ包括的な研究は行われていない。

3.3. 複中心言語ドイツ語とアイデンティティ

ナショナルなオーストリアアイデンティティ構成に関するオーストリアドイツ語の意義については、二つの極論が存在する。その一つは、ある意味でオーストリアはドイツの言語・文化ネイションの一部であり、オーストリアドイツ語の存在そのものを否定する意見である。また他の立場とは、ドイツ語のオーストリアヴァリエーションにオーストリアアイデンティティ構成にとって重要な役割があり、一種のオーストリア文化ネイションと考える見解である。

前者の意見を主張するのは、既に言及したように、ネイション区分の基準を「母語」とする L. Höbelt があげられるが、この基準に従うとドイツ語を話すオーストリア人、ドイツ語を話すスイス人、南チロル人の大多数は「ドイツ語人」と見なされことになる。

さらにオーストリア人は「ドイツ文化の市民」であるという事実を強調するのが、H. Scheuringer である。彼はオーストリアドイツ語の言語的特徴から出発し、「たいていのオーストリア人は言語的に、そして根元的に言語空間中心のその文化表現形式において、ドイツ文化の市民であり、その意味でドイツ人であるという言語史的に覆すことができない事実が存在する」²⁸と主張し、さらに「plurizentrisch（複中心的）という用語は、ドイツ語地域の地域分布に適していない」²⁹と述べ、国家的な空間とドイツ語の地域的な空間の不一致を指摘している。複中心的なコンセプトという意味でのナショナルな言語的共通性よりも、国境を越える共通性と国内の差異がより重要であるという見解であり、もちろん彼にとっては、ドイツ語のオーストリアヴァ

リエーションにオーストリアアイデンティティ形成の役割があるという考えはない。

他方、オーストリアドイツ語にオーストリアアイデンティティ構成の重要な役割があると主張する後者の意見は、すでに60年代から見られる。ナショナル的な自己認識過程とドイツ連邦に対する言語区分に、オーストリアドイツ語の意義をエッセイ風に語ったのが、K. Kahl である。著書「オーストリア人の醜いドイツ語」³⁰ で、オーストリアドイツ語の北方化を嘆いている。例えば、Mistkübel が消滅し Abfallkübel (ごみバケツ) になり、Maurer が Bauarbeiter (建設・土木作業員) に、Schuster が Schuhmacher (靴屋、靴製造・修繕職人) に、Zöllner が Zollwachebeamter (税関検査官) になった。オーストリアでは1945年以降、ナショナル意識が強くなり、政治の分野では誰もドイツとの併合を望んでいないにもかかわらず、なぜ言語領域でこのような併合が進むことになったのかと嘆いている。

R. Muhr も後者の立場を主張する代表的なゲルマニストである。「ドイツ語を話すこと」と「独自の国家性」との間の乖離がまだ明確に解明されていないことを問題にしている。即ち、オーストリア第一共和国の「ドイツ語ナショナリズム」と、その後の第二共和国で頻繁に開催されている政治家達による記念講演スピーチなどに見られる「オーストリア言語ナショナリズム」を批判し、オーストリア人にとって言語意識が不十分であるのは、言語学と教育学にその責任があることを指摘している。特に学校での言語授業で、ドイツ語が複中心言語であることに言及せず、共通ドイツ語という一面的な授業に終始している点を問題視している。ナショナル言語を形成することが問題ではなく、オーストリアという国家領域に現存する言語を言語学的な記述の出発点として観察し、オーストリアに一般的な言語使用を確立することを彼は目的としている。即ち、オーストリアドイツ語を体系的にまとめ、その明確な特徴を示し、それを住民の意識に認識させることが重要であると主張している³¹。

W. Pollak もオーストリアドイツ語がオーストリアアイデンティティ構成に重要な役割を果たしていると強調する。「私の責務は、多くのオーストリア人の幾重にも疲れ果てた自己意識を、オーストリア的な特徴を示すヴァリエーションを認識することによって、より強めることである」³² と述べている。彼はさらにオーストリアアイデンティティの「精神神経症的」な特徴を次のように指摘している。オーストリア人は、ドイツ語のオーストリア的な特徴を認識しようという要求をもつ反面、オーストリア人は言語的に外部から規定される「異質中心主義」である。即ち、オーストリア人はドイツの Duden を手本にさせられている。オーストリアには外部でコントロールされた Soll-Norm (Duden) と、自己内部で統一された使用基準 (Gebrauchsnorm)

の間に大きな間隙が存在する。それが一種の「精神神経症的規範設定 (schizoide Normein-
stellung)」といわれる所以であると、オーストリア人の矛盾したアイデンティティを彼は指弾して
いる³³。

ORF のアナウンサーの発音でよく指摘されることであるが、オーストリア人は本来話されて
いるように話してはいけない、そして話すべきように話すことができないのである。しかし、オー
ストリアアイデンティティ意識の増加とオーストリア標準語の特徴に対する感受性が増大するこ
とは、互いに相互強化の関係にある。またオーストリアアイデンティティとオーストリアドイツ
語の相互関係は、食料品表示法におけるラベル表示の問題として、即ちドイツ連邦の標準形を優
先する EU 内の傾向に対するリアクション (EU 加盟議定書第10条項)³⁴ として現実化された。
このような出来事も言語的自己意識プロセス構築のための一手段と考えることが出来る。そして
この言語自己意識の度合いが、ナショナルアイデンティティの強さに対するセンシブルなバロメー
ターになり、この言語的な自己意識はもはやナショナル的な自己意識確立には不可欠な要素であ
ると言えよう。

3.4. 談話分析に見られるオーストリアアイデンティティ

冒頭に引用したオーストリア連邦大統領 Thomas Klestil の演説は、ナショナルアイデンティ
ティ論争構造に関する研究プロジェクトのコーパスから得られた資料である。1990年代の公の演
説ではナショナルアイデンティティ構成に関する言葉を引き合いに出すことは困難であったが、
当時の連邦大統領のこの演説はオーストリアの政治家にとっては勇気のあるかなり踏み込んだ演
説と見なされている。

一般的に政治的な追悼演説などでは国民的な合意のために、主に国家ナショナリズム的な方向
に力点が置かれる場合が多い。しかしその例外がケルンテンのウールリヒスベルクでの1995年当
時国防大臣であった Werner Fasslabend の演説である。ここでは暗に大ドイツ文化ネイショ
ンが示唆されている。その Fasslabend の演説内容を以下に引用する。

„Für die meisten Menschen der heutigen Generation ist es eigentlich unfassbar,
daß im Rahmen eines Volkes, das im 18. und 19. Jahrhundert großartige, feinsinnige
Menschen von Weltgeltung wie Goethe und Schiller, Lessing, Hölderlin oder Rilke,
Menschen wie Bach und Beethoven, Mozart, Haydn und Wagner, Kant, Schopenhauer,

Hegel und Nietzsche hervorgebracht hat, daß ein solches Volk im zweiten Drittel des 20. Jahrhunderts durch ein diktatorisches System seine Macht ausgespielt hat, was dazu führte, daß nicht nur die Shoah, der Holocaust, möglich war, sondern, daß darüber hinaus ganz Europa mit einem Krieg überzogen wurde: vom Eismeer bis in die Wüsten Nordafrikas und vom Atlantik bis zum Kaukasus.“ (Verteidigungsminister Werner Fasslabend am 1.10. 1995 anlässlich der „Friedens-und Europafeier“ am Ulrichsberg)³⁵

「今日の世代の多くの人々にとってそもそも把握しがたいことであろうが、一民族内で18、19世紀に偉大で感受性の鋭い世界的に評価される人物が輩出された。たとえば Goethe, Schiller, Lessing, Hölderlin, Rilke かつまた Bach, Beethoven, Mozart, Haydn, Wagner, Kant, Schopenhauer, Hegel, Nietzsche のような人物である。またこの民族は20世紀の三分二の間、独裁的な組織でその力を発揮し、ショアー、ホロコーストだけでなく、さらにヨーロッパ全体を一つの戦争で戦場にすることも可能であった、氷海から北アフリカの砂漠まで、大西洋からカフカズ（コーカサス）まで。」

この演説では、Volk という概念が「自分たちの偉大な Volk」と賞賛され、その「一つの Volk」には、ドイツナショナルフォルク概念を引き起こす Goethe, Schiller, Bach 等と、オーストリアナショナルフォルクを象徴する Mozart, Haydn 等が同時に取り上げられ、明らかに大ドイツ文化ネイションが示唆されている。また注意せねばならぬのは、戦争地域の地理学上の定義が明らかにナチスの言葉遣いを想起させている点であろう。

このような政治的な公式の演説とは違って、グループ討論やインタビューでは、文化的言語的な要素がオーストリアアイデンティティ構成の一要素として表現される場合が多い。多くの討論参加者やインタビューによって促されることなく、自発的に無意識に、アイデンティティを構成する本質的なものとなるのが、言語である。オーストリアの共通言語ドイツ語は、新旧の少数派言語に対するオーストリア内の境界を定める重要な要素であり、かつまたオーストリアドイツ語としてドイツ連邦のドイツ語に対する境界を定める重要な要素でもある。この点について、ケルテンでの討論会で、ある参加者が次のように端的に表現している。

„Es gibt so lang verschiedene Identität, solange es verschiedene Erlebnisräume gibt

und verschiedene Sprachn, das ist für mich das wichtigste bei Identität“.³⁶ (Gruppendiskussion)

「様々な体験空間と様々な言語が存在する限り、非常に様々なアイデンティティが存在する、それは私にとってアイデンティティにおいて最も重要なことである。」(グループ討論)

さらにその討論会で、参加者の一人が、言語をオーストリアの重要なアイデンティティを構成する要素と位置づけ、次のように述べた。

„Ich glaub/also i seh die Identität des Österreichers eigentlich an seiner Sproche sehr stork - also daß unsere Sprache sich sehr stork von/zum Beispiel von der Sprache der Schweizer oder der - Deutschn unterscheidet - des gluab i schon“.³⁷ (Gruppendiskussion)

「私が思うには、オーストリア人のアイデンティティはそもそもその言語に強く表れている、だから我々の言語はスイス人の言語やドイツ人の言語と区別される、私は確かにそう思う。」(グループ討論)

しかしさらに詳しく観察すると、討論会に参加した者達は、彼らにとって非常に重要な言語を、オーストリアの標準ドイツ語 (ein österreichisches Hochdeutsch) ではなくて、むしろ方言的な日常語的な言語形式と理解している。そして独自のオーストリア標準とナショナルヴァリエーションについての意識存在は非常に低いことがわかる。様々な言語ヴァリエーションはお互いに混沌とした状態に陥っている。たとえばある討論参加者は次のように述べている。

„I würd dazua sogn daß auch: die Sprache - ein Teil der Identität ist - und: i glaub: daß es schon richtig ist daß:/daß de - /der österreichische Dialekt do muaß i sogn holt bleibt.“ (Gruppendiskussion)³⁸

「さらに付け加えたいことは、言語はアイデンティティの一部であるということである。それは正しいと思う。オーストリア方言を維持する必要がある。」(グループ討論)

オーストリアの言語ヴァリエーションが特別な役割を果たしていると思える領域は、挨拶形式の領域である。現在でも „Servus!“, „Küss die Hand!“, „Habe die Ehre!“ のような挨拶言葉が好んで日常生活で頻繁に使われている。そしてドイツ連邦のドイツ語 „Tschüs!“ という挨拶言葉が、テレビを通じてオーストリア全域に、とりわけ子供達の間益々広まっていることを嘆く人々が多いことも事実である。

ナショナル的な言語特徴のもう一つの重要な領域は、料理用語の分野である。グループ討論やインタビューで明確になったことは、オーストリアで料理メニューにドイツ連邦のドイツ語表現が使われると、精神的にも差し障りとなる。フォアアルルベルクのある人は、「言語帝国主義」と関連づけて次のように発言している。

„Die Sprache - /ah a Land das vome andere okkupiirt wore ischt heb bisher müeße dessn Sprache überneha. Und - mir wär schon nit wohl - wenn i die ganze norddütsche Usdrück jertz verwende muoß - gang i letschthin in e Lokal - (Pfi/) an Pfifferling-Rahmsauce ha i denkt „Menschnskind! Pfifferling“ - i hans nit emol checkt was es ischt de han igfroget - daß es Schwämmle sind oder? was söll denn des überhaupt also das seh i überhaupt net i:. aber überhaupt nitta. Daß i - /daß i uf mi:ner Speisekarte dütschi Begriffe ha mueß. seh i überhaupt nüt i:.“³⁹ (Gruppendiskussion)

「今まで占領されていた国が、占領していた国の言葉を引き継がなければならないとは、全く北ドイツの表現を使用しなければならないなんて、私の気分はよくない。最近、居酒屋に入ったとき、Pfifferling-Rahmsauce（アンズタケ・クリームソース）に気がついた。『なんと Pfifferling ですって!』私はそれが何なのかチェックしていなかった。それでそれが茸であるのかをたずねた。いったいそれはなんですか。わたしは全く見たことがないと。我々の料理メニューにドイツの概念を入れるとは、全く理解できない。」(グループ討論)

EU 加盟採決前のキャンペーンで、オーストリア連邦経済議会は、次のような広告宣伝文書を掲げていた。

„Alles bleibt, wie es ißt“ (Überschrift)

Was uns lieb und teuer geworden ist, nimmt uns auch als EU-Mitglied keiner weg: den Würstelstand nicht, den Heurigen, die Kipferl und die Semmeln nicht. Marmelade wird nicht Konfitüre heißen, Topfengolatsche nicht Sahnetörtchen und Burenwurst nicht Bockwurst. Die österreichische Identität bleibt uns erhalten, auch in der EU.⁴⁰

「全ては現在食している状態のままである」(表題)

「我々が好きで大切なものを、誰も EU メンバーとして、我々から奪い取ることはできない：ソーセージスタンドも、ホイリゲも、クロワッサンとゼンメルも。Marmelade は Konfitüre と呼ばれない、Topfengolatsche は Sahnetörtchen とは呼ばれない、そして Burenwurst は Brockwurst と呼ばれない。オーストリアのアイデンティティは EU の中でも維持される。」

このような EU 加盟や EU との「ママレード戦争」でのキャンペーンに現れる表現からも、オーストリアの料理関係に関する用語問題は明らかにアイデンティティをめぐる政治的手段として利用されやすいことが理解できる。

このような討論会やインタビューでは、ドイツ連邦のドイツ語との違いはとりわけ語彙、音声領域、語用論的な領域で確認できるが、その差異はしかし主に日常的、方言的領域に見られる。ドイツ語を話すオーストリア人の言語に対する見解には二面性がある。その一つは、オーストリア人にとって言語が重要であるという認識が強調される場合で、特に一定のシンボリックな言語使用領域において顕著である。例えば、既に言及した料理メニューや挨拶言葉等においてである。他方また、複ナショナル言語であるドイツ語の一ヴァリエーションとしてのオーストリア標準語に対する意識は薄く、ドイツ連邦のドイツ語とオーストリアドイツ語間の差異は、北ドイツ語と南ドイツのバイエルン語間の差異と同じ領域にあると考えている人々が多いと言えよう。

4. おわりに

第1・2章では、「国家ネーション」と「言語・文化ネーション」の差異と特性について、またオーストリアでのアンケート調査の結果では83%が国家ネーションを支持しているが、両ネーションの複雑な関係がオーストリアナショナルアイデンティティ形成に大きな影響を与えており、言語はナショナルアイデンティティを議論する際に不可欠な要素であることを述べた。また歴史的にドイツとオーストリア・ハンガリー帝国におけるネーションと言語の関わりを概観し、オー

ストリア第二共和国において、言語・文化ネーションよりも、国家ネーションを前面に出さざるを得ないその背景を指摘した。

第3章では、「オーストリアドイツ語はオーストリアアイデンティティ構成にとって、どの程度役割を果たしているか」を問題提起し、複中心言語であるドイツ語の一ヴァリエーションであるオーストリアドイツ語の特性とオーストリア人にとっての言語自意識について論じた。さらに講演会、討論会、インタビュー等の談話分析資料を利用して、オーストリア人にとってオーストリアアイデンティティを構成する要素として、言語が、特にオーストリアドイツ語が重要であること、しかし同時にまた標準オーストリアドイツ語に対する意識が低いことを確認した。

現在のオーストリア第二共和国においては、たびたび「大ドイツ的」という表現が使われる。これはもちろんドイツとオーストリアを含めたドイツ語地域全般を指している。しかしネーションという表現が入ると、憲法上の理由から「大ドイツ的ネーション」という表現はタブーとなる。ネーションとしてのドイツとオーストリアは歴史家にとっても政治家にとっても混同が許されない。この事実が現在のオーストリア一般市民にも定着し、社会的なアンケート調査にも国家ネーション重視の形で現れている。しかし日常無意識に使用している言語に関しては、オーストリアドイツ語を意識して使用する一般市民は少ない。ドイツ各地に方言があるのと同様に、オーストリアドイツ語も一つの方言と見なし、オーストリア標準語を意識する市民は少ない。特にドイツ南部のバイエルン方言は言語学的にオーストリアの三分の二の地域に及んでいる⁴¹。言語学的には1930年代にいわゆるウィーン学派(Wiener Schule)によって唱えられた „bairisch-österreichische Mundart“ という表現も存在するが、これはオーストリアエリートの大多数にドイツ言語・文化ネーションに所属するのは当然であると思わせる根拠の一つとなっている。

„Der Österreicher unterscheidet sich vom Deutschen durch die gemeinsame Sprache“
「オーストリア人がドイツ人と区別されるのはその共通の言語によってである。」⁴²

この表現には、現在のオーストリアドイツ語とドイツ連邦のドイツ語を巡る中核的な問題が潜んでいるように思われる。大多数のオーストリア市民はもはやドイツ人とは感じていない、オーストリア人は非ドイツ的国民意識を持っている。しかし彼らの言語意識には、すでに言及したようにアンビバレントな側面がある。W. Pollak と R. Muhr の言ういわゆる「言語的精神神経症」である。即ち、オーストリア人は一方でオーストリアドイツ語の特徴を意識的に認識しよう

と望むが、他方ですでに体系づけられた「北」の標準ドイツ語（Duden）に自ら好んでコントロールされようとしている。このオーストリア人特有のアンビバレントな特性が、EU 加盟をめぐる生じた出来事（議定書第10条項）にもまた談話分析結果にも現れている。

ネイションを構築するには、言語は重要な役割を果たしている。しかしある一定のネイションが完成すると、言語は一般市民にとって無意識な存在となるのが常である。しかしオーストリア第二共和国では、言語がアイデンティティ構成要因として今なお強く意識されねばならない状況が続いている。それは、ドイツ連邦共和国のドイツ語に対するオーストリアドイツ語の意識問題だけでなく、国家語ドイツ語としての問題、また少数言語話者・複言語話者達にとってのオーストリアアイデンティティの意義とその可能性という問題も含まれるからであろう。後者については稿を改めてさらに論ずる必要があるだろう。

注

- 1 de Cillia (2006a), S.72.
- 2 vgl. Fessel-GfK (2004), S.14.
- 3 vgl. de Cillia (1998), S.53.
- 4 Coulmas (1985), S.47.
- 5 ibid., S.12.
- 6 vgl. ibid., S.30-31.
- 7 *utraquistische Schule* とは、外国語（ドイツ語）による知識習得能力が十分なものとなり、授業語としての母語（少数派言語）が必要でなくなるまで、母語と外国語を同時に授業語として使用する教育体制をとる学校のことである。vgl. de Cillia (1998), S.126.
- 8 vgl. Stevenson (1991), S.38.
- 9 vgl. Barbour (1991), S.39.
- 10 vgl. Coulmas (1985), S.44.
- 11 vgl. de Cillia, (1998), S.59f.
- 12 vgl. Fessel-GfK (2004), S.10.
- 13 vgl. Höbelt (1994), S.341.
- 14 vgl. Bruckmüller (1994), S.17.
- 15 vgl. Fessel-GfK (2004), S.14.
- 16 vgl. Reiterer (1988), 13.
- 17 Dittmar/S-Regner (2001), S.521.
- 18 Barbour/Stevenson (1988), S.11.
- 19 v. Polenz (1988), S.216.
- 20 vgl. Ammon (1995), S.42ff.

- 21 vgl. Ibid., S.42ff.
22 vgl. Clyne (1993), S.3.
23 vgl. 坂野 (2001), S.99-111.
24 vgl. Reiffenstein (1982), Dressler/Wodak (1983), Moosmüller (1990, 1991), Wiesinger (1988, 2006), Muhr (1989).
25 vgl. de Cillia, R. (2006b), S.54f.
26 Moosmüller/Dressler (1990), S.81-82.
27 vgl. Moosmüller (1991), S.22.
28 Scheuringer (1992), S.171.
29 ibid., S.151.
30 vgl. Kahl (1966), S.31.
31 vgl. Muhr (1989), S.21ff.
32 Pollak (1992), S.5.
33 vgl. Ibid., S.14ff.
34 vgl. 坂野 (2005), S.26ff., u. 坂野 (2007), S.79ff.
35 de Cillia (2006a), S.74. vgl. auch Wodak/de Cillia/Reisigl/Liebhart/Hofstätter/Kargl (1998), 175ff.
36 de Cillia (2006a), S.75.
37 ibid., S.75.
38 ibid., S.76.
39 ibid., S.77.
40 ibid., S.78.
41 vgl. 坂野 (2002), S.2ff.
42 vgl. Sedlaczek, R. (2004), S.7ff. この表現はよく Karl Kraus からの引用と言われるが、その根拠が明確ではない。Sedlaczek は、George Bernhard Shaw の “England and America are two countries divided by a common language.” からの借用翻訳と見なしている。

参考文献

- Ammon, U. u. a. (Hrsg.) (2004): Variantenwörterbuch des Deutschen. Berlin/New York.
Ammon, U. (1995): Die deutsche Sprache in Deutschland, Österreich und der Schweiz. Berlin/New York.
Barbour, St. (1991): Language and Nationalism in the German-speaking Countries. In: Meara, P./Ryan, A. (1991): 39-48.
Barbour, St./Stevenson, P. (1998): Variation im Deutschen. Soziolinguistische Perspektiven. Berlin/New York.
Bruckmüller, E. (1994): Österreichbewußtsein im Wandel. Identität und Selbstverständnis in den 90er Jahren. Wien.

- de Cillia, R. (1998): Burenwurscht bleibt Burenwurscht. Klagenfurt/Celovec.
- de Cillia, R./Wodak, R. (2006a): Ist Österreich ein „deutsches“ Land? Innsbruck.
- de Cillia, R. (2006b): Varietätenreiches Deutsch. Deutsch als plurizentrische Sprache und DaF-Unterricht. In: Krumm, H. J./Portmann-Tselikas P. R. (Hrsg.) (2006): Begegnungssprache Deutsch - Motivation, Herausforderung, Perspektiven. Innsbruck, Wien, Bozen: 51-65.
- Clyne, M. (1993): Die österreichische Nationalvarietät des Deutschen im wandelnden internationalen Kontext. In: Muhr (1993) (Hrsg.): Internationale Arbeiten zum österreichischen Deutsch und seinen nachbarsprachlichen Bezügen. Wien: 1-6.
- Coulmas, F. (1985): Sprache und Staat. Berlin/New York.
- Dittmar, N./Schmidt-Regener, I. (2001): Soziale Varianten und Normen, In: Helbig u. a. (2001): Deutsch als Fremdsprache. Berlin/New York: 520-534.
- Dressler, W. U./Wodak, R. (1983): Soziolinguistische Überlegungen zum »Österreichischen Wörterbuch«. In: Dardano, M. u. a. (Hrsg.): Parallela. Akten des 2. österreichisch-italienischen Linguistentreffens. Roma. Tübingen: 247-263.
- Ebner, J. (1980): Wie sagt man in Österreich? Wörterbuch der österreichischen Besonderheiten. 2. Aufl. Mannheim/Wien/Zürich.
- Fessel-GfK (2004) Institut für Marktforschung: Studie LIFESTYLE SPEZIAL, 2004 - Österreichische Identität. Wien.
- Höbelt, L. (1994): Österreich=deutsch bundesrepublikanisch. In: Botz/Sprengnagel (1994) (Hrsg.): Kontroversen um Österreichs Zeitgeschichte. Wien. : 338-345.
- Kahl, K. (1966): Das häßliche Deutsch des Österreicher. Wort in der Zeit 5: 27-31.
- Meara, P./Ryan, A. (1991) (eds.): Language and Nation. Cardiff.
- Moosmüller, S./Dressler, W. U. (1990): Hochlautung und soziophonologische Varietät in Österreich. In: Jahrbuch für internationale Germanistik. Jg XX, HI, Bern.
- Moosmüller, S. (1990): Einschätzung von Sprachvarietäten in Österreich. In: IJSL. 83:1990.
- Moosmüller, S. (1991): Hochsprache und Dialekt in Österreich. Wien, Köln, Weimar.
- Muhr, R. (1989): Deutsch und Österreich (isch): Gespaltene Sprache - Gespaltenes Bewußtsein - Gespaltene Identität. In: ide 2: 74-98.
- Polenz, P. von (1988): „Binnendeutsch“ oder plurizentrische Sprachkultur. In Zeitschrift für Germanistische Linguistik 16/1988, 198-218.
- Pollak, W. (1992): Was halten die ÖsterreicherInnen von ihrem Deutsch? Wien: ISSS.
- Reiffenstein, I. (1982): Hochsprachliche Norm und regionale Varianten der Hochsprache. Deutsch in Österreich. In: Moser, H. (1982) (Hrsg.): Zur Situation des Deutschen in Südtirol. Innsbruck.
- Reiterer, A. F. (Hrsg.) (1988): Nation und Nationalbewußtsein in Österreich. Wien.
- Scheuringer, H. (1992): Deutsches Volk und deutsche Sprache. In: Österreich in Geschichte und Literatur, Jg. 36/H.3, Mai-Juni 1992, 162-173.
- Sedlaczek, R. (2004): Das österreichische Deutsch. Wien.

- Stevenson, P. (1991): Deutschland einig Vaterland? In: Meara, P./Ryan, A. (1991) (eds.): 27-38.
- Wiesinger, P. (Hrsg.) (1988): Das österreichische Deutsch (=Schriften zur deutschen Sprache in Österreich 12). Wien.
- Wiesinger, P. (2006): Das österreichische Deutsch in Gegenwart und Geschichte. Wien.
- Wodak, R./de Cillia, R./Reisigl, M./Liebhart, K./Hofstätter, K./Kargl, M. (1998): Zur diskursiven Konstruktion nationaler Identität. Frankfurt/Main.
- 坂野 久 (2001): オーストリアの正書法辞典—特に Österreichisches Wörterbuch について—、近畿大学語学教育部紀要第1巻第1号、99-111頁.
- 坂野 久 (2002): 「オーストリアドイツ語」をめぐる、近畿大学語学教育部紀要第2巻第1号、1-10頁.
- 坂野 久 (2005): 「オーストリアドイツ語」と言語政策、近畿大学語学教育部紀要第5巻第2号、23-33頁.
- 坂野 久 (2007): オーストリア第二共和国の言語政策、近畿大学語学教育部紀要第7巻第2号、65-85頁.